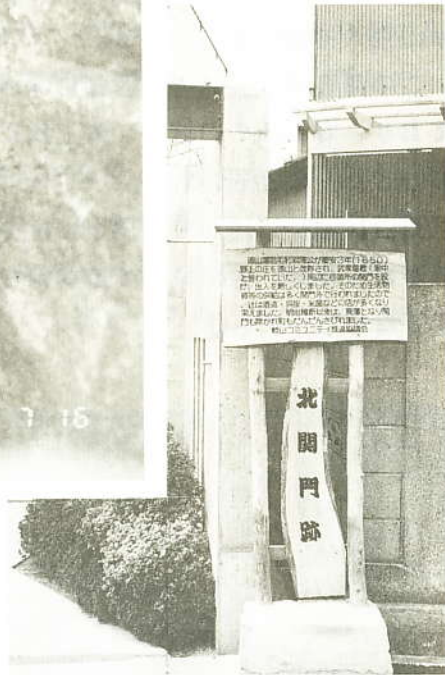




関門基礎石



北関門跡

徳山藩祖毛利就隆が慶安3年（1650年）野上を徳山と改称し、武家屋敷（家中と言われていた）周辺に四か所の関門を設け、出入を厳しくした。

そのため生活物資等の供給は多く関門外で行われたので、辻は酒造・呉服・米屋などの店が多くなり栄えた。

明治維新以後は、廃藩となり関門も除かれた。

## 紙すき場跡

毛利藩は財政を豊かにするために、米・塩・紙の三白政策に力を入れており、抄紙（紙すき）業は、徳山藩の産業のなかでもとくに力を入れていた。

紙すきの大部分は山間部の大向・大道理・川曲・四熊・上村・須方などで行われていたが、ここ（栄谷）でも昭和の始めごろまで行われていた。

和紙の原料であるコウゾ、ミツマタを12月に採取し、適当な長さ（1.3mぐらい）に切りそろえて束ね、大釜の上に並べ、直径高さともに1.5mのこがという大きな桶の蒸し器をかぶせて蒸し、皮を剥ぎ取って製紙されていたようである。

徳山藩の公用紙は、萩の本藩の黄紙と区別するために、岩国の吉川家や須佐の益田家の御用紙と同じく、薄アズキ色の紙が用いられていた。この紙は栄谷でつくられていたが、紙をすくときに、アズキの汁を入れたり、モヤ（たきぎにする小枝や木の葉で粗朶ともいう）を入れたりして、紙に色をつけていた。

